

尿路不定愁訴に対する猪苓湯、 猪苓湯合四物湯の効果

大阪鉄道病院泌尿器科 (医長: 堀井明範)

堀 井 明 範

大阪市立大学医学部泌尿器科学教室 (主任: 前川正信教授)

前 川 正 信

CLINICAL EVALUATION OF CHOREI-TO AND CHOREI-TO- GO-SHIMOTSU-TO ON THE PATIENTS WITH LOWER URINARY TRACT SYMPTOMS

Akinori HORII

*From the Department of Urology, Osaka Tetsudo Hospital
(Chief: Dr. A. Horii)*

Masanobu MAEKAWA

*From the Department of Urology, Osaka City University School of Medicine
(Director: Prof. M. Maekawa)*

Chorei-to was administered orally to 30 patients who complained of lower urinary tract symptoms without pyuria. Efficacy rate of pollakisuria was 92.9%, miction pain 85.8%, and voiding discomfort 85.7%. Total efficacy rate was 76.0%. No untoward effect was observed. Therefore, Choreito was thought to be an effective drug for the patients with lower urinary tract symptoms.

Patients with the same symptoms tried Choreito-go-shimotsu-to, and its efficacy rate turned out to be 80%, but untoward effect such as epigastralgia was observed on 2 patients. These 2 drugs are thought to be effective on patients suffering from lower urinary tract symptoms.

(Acta Urol. Jpn. 34: 2237-2241, 1988)

Key words: Chorei-to, Chorei-to-go-shimotsu-to, Lower urinary tract symptoms

緒 言

猪苓湯は、傷寒論を出典とする化痰利水剤の処方であり、水熱相結を適応症とする。漢方あるいは中医学に造詣の浅い筆者にとって、証を考えながら診断を進めることは困難である。逆に、証にあまりとらわれることなく、ある特定の疾患に対し特定の薬剤を投与し、その効果を retrospective に解析することは、中西医学とも言うべき分野を作る上で意味のあることと思われる。筆者は著明な尿所見を呈しないにもかかわらず、種々の下部尿路の訴えをもつ患者に対し、猪苓湯ならびに猪苓湯合四物湯を投与し若干の成績を得たので、考察を加えて報告する。

対象ならびに用法・用量

1. 対象

対象は、尿所見に顕著な変化を認めないが下部尿路に頻尿、排尿痛等のさまざまな不定愁訴を訴える症例30例につき検討した。対象症例は、Table 1のごとく、男性4例、女性26例であり、年齢分布は30歳から72歳、平均57.9歳であった。以前に行った同様の検討では、82症例について検討、うち男性3例で、年齢分布は21歳から74歳、平均年齢は、51.0歳であった。

2. 用法ならびに用量

ツムラ猪苓湯ならびにツムラ猪苓湯合四物湯エキス製剤を一日7.5g食前分3投与にて服用させ、服用の有無を問診にてチェックした。服用期間は2週間で投与前後における自覚症状ならびに他覚所見の変化につきアンケート方式で検討した。

3. ローレル指数別患者分布

今回、証にはあまり拘泥することなく効果を検討したが、retrospective な解析に供するため、各患者の

ローレル指数を算出した。ローレル指数の各群の分布は、Table 2 のとおりで、I型36.7%、II型53.3%、III型10%と前回と比較して著明な変化は認められなかった。前回の検討では、I型40.3%、II型40.3%、III型19.4%であった。

Table 1. 対象患者背景

① 性

男性 4 例

女性 26 例

② 年齢

年齢	人数	率
20~29才	0	0%
30~39	3	10
40~49	4	13
50~59	10	37
60~69	8	23
70以上	5	17
不明	0	—

30才~72才 平均 57.9才

Table 2. ローレル指数分布

I型(やせ) ~1.29	11例 (36.7%)
II型(普通) 1.30~1.49	16例 (53.3%)
III型(肥満) 1.50~	3例 (10.0%)

4. 効果判定基準

効果判定基準は、Table 3 のごとく各症状につき、著効から悪化までの5段階に分類した。また排尿痛、排尿時不快感、頻尿の三症状につき各項目を組み合わせてやはり著効から悪化までの5段階に分類した。

Table 3. 効果判定基準

排尿痛、排尿時不快感、頻尿の三症状につき、以下の如く判定した。

著効：※又は+の三症状がすべて消失したもの

有効：二段階以上の改善が二つ以上の症状について見られた者

やや有効：一段階の改善が二つ以上の症状について見られた者

無効：投与による改善が見られなかった者

悪化：投与中に症状の悪化した者

Table 4. 症状別効果, 症状別の発生頻度と有効率

	排尿痛	排尿時不快感	頻尿	残尿感	排尿困難	血尿
3段階改善	2 (28.6%)	0	2 (14.3%)	2 (14.3%)	2 (20.0%)	1 (9.0%)
2段階改善	2 (28.6%)	4 (57.1%)	7 (50.0%)	3 (21.4%)	3 (30.0%)	4 (36.4%)
1段階改善	2 (28.6%)	2 (28.6%)	4 (28.6%)	4 (28.6%)	3 (30.0%)	3 (27.3%)
不変	1 (14.3%)	1 (14.3%)	1 (7.1%)	5 (35.7%)	2 (20.0%)	3 (27.3%)
悪化						
不明						
例数(頻度)	7 (23.3%)	7 (23.3%)	14 (46.7%)	14 (46.7%)	10 (33.3%)	11 (36.7%)

Table 5. 症状別効果, 症状別の発生頻度と有効率

	排尿痛	排尿時不快感	頻尿	残尿感	排尿困難
3段階改善	0	0	4 (5.9%)	0	4 (40.0%)
2段階改善	5 (15.6%)	14 (23.0%)	21 (30.9%)	3 (33.3%)	2 (20.0%)
1段階改善	16 (50.0%)	29 (47.5%)	21 (30.9%)	1 (11.1%)	0
不変	7 (21.9%)	17 (27.9%)	17 (25.0%)	3 (33.3%)	2 (20.0%)
悪化	3 (9.4%)	1 (1.6%)	3 (4.4%)	0	1 (10.0%)
不明	1 (3.1%)	0	2 (2.9%)	2 (22.2%)	1 (10.0%)
例数(頻度)	32 (39.0%)	61 (74.4%)	68 (82.9%)	9 (11.0%)	10 (12.2%)

成 績

1. 症状別効果

今回の猪苓湯エキス剤投与による症状別の効果は、Table 4のごとくである。各症状別の発生頻度は、頻尿、残尿感が多く約半数の患者に認められた。その他血尿、排尿困難が約3分の1の患者に認められた。やや有効から著効までの有効率では、頻尿が際立っている感じがある。すなわち92.9%の改善率である。その他排尿痛に対しては85.8%、排尿時不快感に対しては85.7%の有効率を示している。Table 5は前回の検討時の有効率である。今回の検討できわだって前回と異なっていたものは、血尿に対する有効率である。前回の検討時には20%前後のものが、今回は72.7%へと飛躍的に向上しているのが注目された。ただ前回は82例であった検討症例が今回は30例であるため、断定は困難と思われる。

2. 総合評価

今回の尿路不定愁訴症例30例に対する総合評価はTable 6に示す通りで、著効1例、有効7例、やや有効15例、計23例、76.0%の有効率であった。無効例は7例に認めたが、悪化した症例は認めなかった。前回82例における検討の総合評価はTable 7の通りであった。著効例は5例、有効例29例、やや有効24例計50例71.6%の有効率であった。悪化例は2例認めたが、エキス剤改善後の現在、判定に慎重を要すると考えられる。

3. ローレル指数別有効率

今回のローレル指数別有効率はTable 8のごとく、

Table 6. 尿路不定愁訴に対する猪苓湯の有効率

	例 数	有 効 率
著 効	1 (3.0%)	76.0%
有 効	7 (23.0%)	
やや有効	15 (50.0%)	
無 効	7	
悪 化		
中 止		
不 明		

Table 7. 尿路不定愁訴に対する猪苓湯の有効率

	例 数	有 効 率
著 効	5 (6.2%)	71.6%
有 効	29 (35.8%)	
やや有効	24 (29.6%)	
無 効	20	
悪 化	2	
中 止	1	
不 明	1	

I型では72.7%、II型では75.0%、III型では100%の有効率を示した。統計学的に各群間に有意差はなかった。前回検討時のローレル指数別有効率は、I型で77.4%、II型64.5%、III型で66.7%であった。この結果でも特に体型による有効率の変動は著明ではないようである。したがって、猪苓湯投与の際、体型を考慮に入れることは必ずしも必要ではないと考えられる。

Table 8. ローレル指数分布別有効率

	I 型	II 型	III 型	不明	全体
著 効	1	4	1		100%
有 効	2 (72.7%)	4 (75.0%)	1 (100%)		
やや有効	6	7	2		
無 効	3	4			
悪 化					
不 明					
計	11	16	3		

4. 猪苓湯合四物湯の尿路不定愁訴に対する効果

下部尿路不定愁訴を主訴とする症例5例に対し、猪苓湯合四物湯エキス剤を7.5g食前分3投与を行い、その結果を排尿痛、排尿時不快感、頻尿の3項目に限定して検討した。既述の効果判定基準に従い検討した結果、Table 9のごとく、有効40%、やや有効40%と高い有効率を示した。症例数は少ないながらも、比較的強い作用を有する方剤と考えるが、今後症例を重ねてゆく必要があると考えられる。

Table 9. 尿路不定愁訴に対する猪苓湯合四物湯の有効率

	例 数	有 効 率
著 効	1	80%
有 効	2 (40%)	
やや有効	2 (40%)	
無 効	1	
悪 化		
中 止		
不 明		

5. 各薬剤の副作用について

エキス剤改善以前の猪苓湯投与にて、82例中2例に胃部不快感などの副作用を認めたが、薬剤中止で直ちに消失した¹⁾。エキス剤改善後では特に副作用を認めなかった。猪苓湯合四物湯については、5例中2例に胃部不快感を認めた。さらに検討を要すると考えられる。

考 察

猪苓湯は、Table 10 のごとく、猪苓、茯苓、沢瀉、滑石、阿膠を構成生薬とする方剤である。目標とするところは五苓散とほぼ同じと考えられるが²⁾、阿膠を含むことにより、止血が期待される点でやや異なる^{3,4)}。しかしながら、生地黄などと異なり止血作用はあまり強度ではなく、実際エキス剤改善以前の検討では、止血作用はあまり認められなかった¹⁾。今回の検討で72%もの有効率を示しているのはやはりエキス剤改善の影響が大きいと考えられる。別にアンケート項目中に

Table 10. 猪苓湯を構成する生薬成分の概要

生 薬 名	基 源	主 要 成 分
日 薬 タクシャ (沢瀉)	サジオモダカまたはその他近縁植物(オモダカ科)の塊根(茎葉基および根をほとんど除去)	多量のでんぷん 四環性トリテルペン アミノ酸、ビタミン類
日 薬 チョレイ (猪苓)	チョレイマイタケ(サルノコシカケ科)の菌核	ergosterol glucan
日 薬 ブクリョウ (茯苓)	マツホド(サルノコシカケ科)の菌核(外層を除去)	polysaccharide pachyman
アキヨウ (阿膠)	哺乳類の皮部より製したゼラチン	glutin chondrin
カッセキ (滑石)	天然の含水ケイ酸アルミニウムからなる粘土鉱物(加水ハロサイト)	含水ケイ酸アルミニウム $Al_2O_3 \cdot 2SiO_2 \cdot 4H_2O$

Table 11. 漢方的症状による患者群別総合評価

	夜眠れない (14)	水をよく飲む (1)	ものごとが 氣にかかる (14)	胸部不快感 (12)		
著 効	1	78.6%	100%	1		
有 効					78.6%	75.0%
やや有効					10	7
無 効	3		3	3		
悪 化						
不 明						
	(46.6%)	(3.3%)	(46.6%)	(40.0%)		

Table 12. 猪苓湯の「証」4項目中の項目数別効果

	0 項 目	1 項 目	2 項 目	3 項 目	4 項 目		
著 効	1	73.3%	100%	100%	66.7%		
有 効	6					1	50%
やや有効	4					4	3
無 効	4			2	1		
悪 化 (中 止)							
不 明							
計	15	4	3	6	2		

入れた、不眠、不安感などの4項目別の猪苓湯の有効率はTable 11のとおりで“水をよく飲む”と答えた者で、下部尿路不定愁訴は猪苓湯投与により、やや改善している。その他はいずれも75%程度の有効率をあげている。Table 12は猪苓湯の証と考えられる4項目中該当する項目数別の有効率である。特に該当する項目数と有効率に相関は認めなかった。これは、猪苓湯の証に関係なく下部尿路不定愁訴症例に猪苓湯を投与しても一定の成績が得られることを示唆していると思われる。猪苓湯は水分の吸収、排泄を是正し、また滑石の消炎作用ともあいまって尿路系の炎症を鎮静化するものと考えられ、胃炎などに対する効果も期待しうる^{5,6)}。今回、猪苓湯の副作用として胃部不快感を認めたが、これは「証」があわない可能性も推測し得る。猪苓湯合四物湯は、猪苓湯の構成生薬に地黄、芍薬、川芎、当帰を加えたものであり、止血作用、抗炎症作用は、猪苓湯よりさらに強いものと思われるが⁷⁾、逆に副作用も強くなるものと考えられ、成績をみても、当方剤では40%に胃部不快感を認め、何らかの胃粘膜保護剤を必要とする症例があった。猪苓湯ならびに猪苓湯合四物湯は同様の愁訴を有する症例に投与できると思われるが、猪苓湯合四物湯を使用する場合、特に高齢者、虚弱者に投与する場合は、副作用に対する注意が必要と考えられた。

結 語

1. 尿に顕著な所見を認めず、下部尿路に不定愁訴を訴える症例に対する猪苓湯、猪苓湯合四物湯の効果を検討した。
2. 猪苓湯では総合有効率76.0%で、特に頻尿に対する効果が著明であった。猪苓湯合四物湯では総合有効率80%であった。
3. 副作用は猪苓湯については出現率0%、猪苓湯合四物湯については40%であった。

文 献

- 1) 堀井明範: 尿路不定愁訴に対する猪苓湯の効果.
第5回泌尿器科漢方研究会講演要旨集. p. 11.
1987
- 2) 南京中医学院: 中国漢方医学概論. p. 294. 中国漢方, 1976
- 3) 山田光胤, 丁宗鉄: 生薬ハンドブック p. 1. 津村順天堂学術部. 1985
- 4) 大塚敬節: 症候による漢方治療の実際. p. 439. 南山堂. 1975
- 5) 刈米達夫: 和漢生薬. p. 322. 広川書店, 1974
- 6) 大塚敬節: 傷寒論解説. p. 102. 創元社, 1977
- 7) 神戸中医学研究所: 中医処方解説. p. 166. 医歯薬出版. 1982

(1988年5月2日迅速掲載受付)